

## 【書評】

今村啓爾編 『異系統土器の出会い』  
A4版、同成社、232頁、2011年11月、本体価格6,000円

[Book Review] IMAMURA Keiji ed., “Encountering of Genealogically Different Types of Potteries”

松田光太郎  
MATSUDA Kotaro

**要旨** 本稿は今村啓爾編『異系統土器の出会い』の書評である。土器研究の第一線で活躍している8人の共同研究者の研究論文（事例・第2～9章）と研究の中心者であり編者でもある今村氏の総括的論文（第1章）からなっている。土器には系統があり、土器が移動することで異なった系統の土器が出会う。第1章の総括的論文では、本書の目的が述べられると共に、以下の研究論文（事例）の内容を抽出・分析し、移動の類型化が試みられている。研究論文では第3～5章は縄文時代中期・後期、第1・6・7章は弥生時代から古墳時代前期、第8章は北海道のオホーツク・擦文を対象とした土器の型式学的研究が展開され、遠距離間を中心とした土器の動き・影響関係、さらにはその背後にある人の動きに対する考察が述べられている。また第9章は土器の土である胎土の分析研究が掲載されている。本稿ではこうした本書の内容をまとめ、その成果や課題について述べる。

## 本書の構成

本書の構成は以下の通りである。

- 第1章 異系統土器の出会い—土器研究の可能性を求めて 今村啓爾
- 第2章 朝鮮半島無文土器と弥生土器の出会い 後藤 直
- 第3章 称名寺式における異系統土器の共存—異系統土器の移入と変容の過程 鈴木徳雄
- 第4章 縄文後期の広域圏と異系統土器の動態—縁帯文土器の場合 山崎真治
- 第5章 土器の折衷—勝坂式と阿玉台式 小林謙一
- 第6章 弥生・古墳時代の土器の移動類型 比田井克仁
- 第7章 古墳出現前後の北部九州における畿内型甕形土器と在地型長胴甕形土器との出会い 佐々木憲一
- 第8章 オホーツク土器と擦文土器の出会い 熊木俊朗
- 第9章 異系統土器が共存する遺跡—土器胎土分析で製作地が区別できるか 河西 学

## 本書の内容

以下に各章の内容についてまとめてみる。

## 第1章 今村啓爾「異系統土器の出会い」

冒頭で本書の目的について、時代を越えて、土器のまとまりとしての移動現象を手掛かりにして、今後どのような土器研究が可能であるのか、その背景にある人間の行動や社会をどこまで復元できるのか、見通すことにあると述べている。

土器移動を(1)製品の運搬、(2)製作者の移動、(3)製作方法の伝播の三様態に分け、各々近距離の(1a)(2a)(3a)と、遠距離の(1b)、(2b)(3b)に分けた。そして本書で主に扱うのは(2b)の製作者を含む集団の遠方への移動であると述べている。土器を系統としてとらえることで、集団移動の有無、移動の規模、移動の継続性、移動した集団と在地集団の関係などがとらえられるとした。移動の類型分類では、移動してきた土器系統の影響が大きいものと小さいものに分けた。また移動先の集団との関係では、(a)進出地域が人口希薄地の場合、(b)行った先に人はいたが互いに避けるように併存した場合、(c)移動先の土着土器が消滅する場合、(d)土着集団と積極的な交渉をもった場合—小さな地域を保ちながらも交渉する場合と移動集団が既存集落の中に入れてもらって生活する場合—があったとした。

## 第2章 後藤 直「朝鮮半島無文土器と弥生土器の出会い」

朝鮮半島南部の後期無文土器と弥生土器の関係を考察した論文。朝鮮半島南部後期無文土器前半期(弥生時代前期～中期前葉併行)・同後半期(弥生時代中期前葉～後葉併行)を扱い、西日本出土の朝鮮半島南部無文土器と形態を同じくする土器を「朝鮮系無文土器」、変容した土器を「擬無文土器」と命名し、その出土傾向を把握した。

福岡平野～三国丘陵では変容しないもの(朝鮮系無文土器)が多く、佐賀平野・熊本平野は変容したもの(擬無文土器)が多い。福岡平野～三国丘陵では朝鮮半島より無文土器を用いる人が来たが、滞在が短期で、社会に融合することはなかった。佐賀・熊本平野では長期間世代を超えて滞在し、相手方の社会に融合していったと解釈した。

一方朝鮮半島では弥生土器が持ち込まれ、変容した擬弥生土器が作られるが、朝鮮無文土器の影響は僅かであるため、滞在は短く、無文社会への融合は殆どなかったと考えた。

## 第3章 鈴木徳雄「称名寺式における異系統土器の共存」

関東地方の後期初頭に存在する称名寺式土器は、西日本の中津式最古段階の土器群が南関東西部に出現すること—初期称名寺式(称名寺Ia式)の成立に始まる。これは西日本の土器と技法面でも一致するため、中津式の単なる模倣や影響として捉えられるものではなく、中津式土器製作者の移住が背景にあったと指摘し、海浜部沿いに舟等を用いて移住したと想定している。

このような近畿・関東両地域の同調関係は、称名寺Ib式では失われ、関東地域の称名寺式の影響が、逆に東海西部や近畿地方に出現するようになる。東西土器群の関係は一方的なものではなく相互影響関係にあったと指摘。称名寺Ic式以降は両地域の土器の変化

の方向に差異が生じ、系統的分岐が顕著となる。交渉の希薄化と捉えている。

関東地方では称名寺式はその出現から終末期に至るまで、長期にわたって、在地の伝統的な土器である加曾利E式系統の土器と共存ながら、増加・拡散し、その間、称名寺式と加曾利E式系統の土器は相互に影響を授受しながら変容する。また初期称名寺式土器をもつ住居が関東の在地的な柄鏡形をなすことから、この移住の背景には在地の人々との濃密な社会関係があったと考えた。両系統の並存は、両系統が互いに相手の系統を意識しながら製作されていたことを意味すると指摘した。称名寺Ⅱ式期には加曾利E式系統の土器の変化により二系統並存の関係性が不明瞭になると同時に、南東北の綱取Ⅰ式系統の土器群の南下により、系統的鼎立状態が出現し、複数の類型が並存する堀之内Ⅰ式土器につながると解釈した。

#### 第4章 山崎真治「縄文後期の広域圏と異系統土器の動態—縁帯文土器の場合」

西日本の後期前葉の土器の動態を述べた論文。この時期関西には縁帯文土器が存在し、関東の堀之内Ⅰ式期に四ツ池式→芥川式→北白川上層Ⅰ式、堀之内Ⅱ式期に北白川上層Ⅱ式土器が成立する。堀之内Ⅰ式期では西日本の土器は関東の堀之内Ⅰ式と連動しているが、堀之内Ⅰ式からⅡ式にかけて東西の土器群は大きく異なった型式変化をたどると言う。この間、土器・情報の流れは関東→関西と一方的であった。関西出土の堀之内Ⅰ式は、在地のアレンジが加えられていること、在地土器と大差ない粘土が用いられていることから、基本的には関東からの移入者が関与して製作したと想定している。また土着の作り手が模倣製作を行った可能性も指摘した。

九州との関係では北白川上層Ⅱ式・彦崎KⅠ式期を中心に中四国に九州系磨消縄文土器（小池原上層式・鐘崎Ⅱ式・平城Ⅱ類）の東漸現象が見られる。瀬戸内・山陰では九州系磨消縄文土器が変容した瀬戸内型・山陰型がそれぞれ作られる。南四国は九州系磨消縄文の分布圏に変わり、人口空白地に九州系磨消縄文土器の人間集団の移住を想定した。

北白川上層式併行期には中四国・近畿では磨消縄文はほとんど失われ、九州と関東で磨消縄文は盛行し、東西の磨消縄文が中間地域に進入し、新たな磨消縄文を生み出す。関西出土の堀之内Ⅰ式の変容したものの中に九州系磨消縄文山陰型や瀬戸内型からの影響があると考えた。

#### 第5章 小林謙一「土器の折衷—勝坂式と阿玉台式」

時・空間が限定的かつ系統群が前後の時期に連なっている伝統的土器群の中に客体的に存在し、複数の土器型式の要素を併せ持つ土器を折衷土器とした。その上でそれを折衷Ⅰ型（同時期に属す複数の異系統土器群の要素・技法を混在させて制作した土器、折衷Ⅱ型（同時期に属す異系統の要素・技法に若干の変更を加えたり、工具のみを代用して自來の規範を逸脱しない表現によって制作した土器）、折衷Ⅲ型（折衷Ⅰ・Ⅱを継承し、引き続き同類のものを生産していくことによって在地土器生産に組み込まれ、新たな系統をなすようになった土器）に類型化した。

また土器系統のレベルを、Ia：その地域の伝統土器群における、その地の集団の系統

の土器およびその系統（在地土器）、I b：その地域の伝統土器群における、隣接するような他の集団の系統の土器およびその系統（在地土器）、II：他地域の伝統土器群の土器およびその系統（搬入土器）、III：他地域の伝統土器群がその地で在地化した土器およびその系統（在地土器）、IV：広域的に認められる特殊なタイプ、V：複数伝統群からその地で折衷された土器およびその系統（折衷土器1・3型）、VI：伝統土器群のバリエーションとして分化した土器およびその系統（折衷土器2・3型）VII：以上のバリエーションとして作られたが後に続かなかった土器（折衷土器）に分類した。

その上で縄文時代中期中葉の勝坂式・阿玉台式の折衷土器を取り上げ、各事例について土器系統レベル、折衷土器の型を評価した。

## 第6章 比田井克仁「弥生・古墳時代の土器移動類型」

弥生時代後期から古墳時代前期の東日本の土器を扱い、交流のあり方について4つの移動類型を設定。大規模融合埋没型：土器組成がそろった状態で一集落を構成する規模で移動するが、最終的には移動先の土地に融合埋没するもの。三河・遠江から南関東への移動が該当する。大規模非融合定着型：土器組成がそろった状態で波及して、最終的には移動先の土地の様式を駆逐してとり代わってしまう場合。伊勢湾地域から北関東への移動（樽式から石田式への交代）がある。小規模埋没型：土器組成がそろった状態で移動するが小規模で最終的には移動先に埋没する。北陸南西部・近江から関東への移動などが該当する。一時波及型：限定形式が客体的に一時的に移動する。S字甕・叩き甕の移動等が相当する。

このうち大規模融合埋没型・小規模埋没型・一時波及型は土器様式の様相が類似している地域間の移動の場合に見られ、大規模非融合定着型は全く異なった土器様式をもつ地域間で見られると指摘。移動先の選定に際しては地理的景観の類似性が関係していると言及した。

## 第7章 佐々木憲一「古墳出現前後の北部九州における畿内型甕形土器と在地型長胴甕形土器の出会い」

本論は弥生時代末期～古墳時代前期の北部九州の土器を扱うが、時期をIA期：弥生V様式末（纏向1類・河内の庄内I式）、IB期：纏向2・3類・河内の庄内II～III式、IIA期：纏向3・4類・庄内III～IV式、IIB期：纏向4・5類・庄内IV～V式、IIC期：布留1式、III期と設定した。そして北部九州の様相を以下のようにまとめた。IA期：在来系土器が主体で、点的に少量の伝統的V様式土器が伝播・受容される。庄内甕は受容されない段階。IB期：在来系土器が主体で、庄内甕が比恵・那珂遺跡群周辺のみで受容・生産された。IIA期：在来系土器が根強く存在しながらも衰退する。庄内系土器群から北部九州型というべき布留式類似土器群が成立。IIB期：布留式類似土器群が面的に波及し、多くの集落でも外来系土器群が在地系土器群に対し優勢になる。IIC期：布留式土器群がほとんどの集落で優勢になる。IIIA期：布留式高坏・布留式系X形小型器台が出現する。在来系長胴甕が減少し、畿内系甕が増加していくが、畿内系甕は北部九州で独自に模倣製作されたと言う。

また壱岐・朝鮮半島南部には北部九州で製作された布留系甕が搬入されるが、朝鮮半島南部では朝鮮半島南部の人たちが独自の轆轤成形技術を用いて布留系甕を模倣製作したものが多く指摘した。

## 第8章 熊木俊朗「オホーツク土器と擦文土器の出会い」

北海道において分布の中心を異にしつつ併存したオホーツク文化（北海道では5～9世紀）と擦文文化（7～13世紀）の関係を論じたもの。オホーツク文化と擦文文化の融合した例として、元地式とトビニタイ土器を取り上げる。

元地式は宇田川編年擦文前期後半～中期に併行する北海道北端部の土器で、オホーツク土器・サハリンのオホーツク土器・擦文土器の三者の要素を併せ持つ一方、どの系統からもスムーズな変遷がたどれない、「どっちつかず」の土器型式と述べている。こうした土器変遷の背後にある人間集団の動きとしては、この時期サハリン・道北端部在地系・道北擦文の各集団の出入りが急激に活発化した結果、ある種の社会的混乱が生じて土器製作技術の伝統継承が困難になったと解釈した。

トビニタイ土器はオホーツク土器に後続する北海道東部の土器で、論者はカリカリウス遺跡出土土器→トビニタイ土器群Ⅱ→トビニタイ土器群Ⅲ・同Ⅰ古段階→トビニタイ土器群Ⅰ新という変遷を考え、前二者をトビニタイ前半（宇田川編年擦文前期後半～中期併行）、後二者をトビニタイ後半（同後期～晩期前半併行）とした。土器組成をみるとトビニタイ土器には典型的な擦文土器や擦文の模倣品が少なからず伴出し、融合状態にあるという。擦文土器からの影響・融合はトビニタイ期前半に道東部北西側（斜里地方）から部分的に始まり、同後半に道東部全域に及んだという。該期に関しては特にトビニタイ期後半の土器群の製作者が問題になっており、トビニタイ土器製作者集団と見る説、擦文土器製作者もいたとする説、擦文土器を製作する女性が製作したとする説を紹介した。

## 第9章 河西 学「異系統土器が共存する遺跡—土器胎土分析で製作地が区別できるか」

はじめに土器の製作地推定の方法、製作地推定のための胎土分析の方法を述べる。そして胎土分析でまず明らかになるのは土器胎土の原料産地である。原料産地はある広がりをもった地域として把握されるので、土器の製作地とは意味が違うということを強調している。また土器の製作地推定のプロセスは、胎土分析によって原料産地を推定したのち、土器の型式学的方法と組み合わせ、土器製作のあり方を推定し、土器製作のあり方と原料産地の関係から、土器の製作地を推定することになるとした。

事例紹介では山梨県縄文中期後半の曾利式土器に関する氏自身の分析事例を紹介し、山梨県の各地には胎土分析からすると在地的土器が主体的に存在し、地域毎に土器製作が行われていたことを述べた。また神奈川県神崎遺跡で出土した弥生時代の東海地方の山中式土器の分析では、三河・西遠江から相模に人が来て山中式土器を製作したと考えられた事例を紹介している。縄文時代前期初頭の東海地方の木島式土器の分析では、各種分析手法による成果の比較を行い、分析者によって分析方法や結果の表現が異なっても、共通性が抽出できることを示した。

## 本書の成果と課題

本書は縄文時代から古墳時代、北海道の擦文・オホーツク土器に至る、いろいろな時代の土器に関して、土器研究の第一線で活躍している研究者の研究論文が掲載されているため、一つの時代にとらわれることなく、土器の動態を客観的に見ることができ、土器研究を行う者にとっては大変参考になる本と言える。

土器には系統があり、ある地域で異なる系統の土器、すなわち異系統土器が共存する場合がある。この異系統土器に関して、出土傾向を分析・把握し、その内容を明示したり、土器の動き・影響関係を考察したりする研究は多数あるが、本書に掲載されている論文はそうした傾向把握や影響関係の考察にとどまらず、その背後にある人の動きの解明を目指した意欲的論文からなることが重要である。編者の今村氏が第1章の総括的論文の中で、土器を「型式」ではなく「系統」としてとらえることによる成果を述べている。本書は、この系統的なものの見方の有効性を実践している研究の集合とすることができる。

第2～9章の各事例における移動の比較や類型化は今村氏によって既に行われているので、最後に本書を通読して感じた2点について述べてみたい。

### 異系統土器と型式・系統

縄文土器編年で用いられる型式は山内清男氏以来、地域と時間を示す一群の土器と認識されており、縄文土器という型式は他地域からの明らかな搬入土器は除外して考えるのが通常である。今村氏の述べる如く、型式と特定集団を関係づけようとする時、製作の伝統も製作者も発見地と関係のないものは省かれなければならないからである。また同様の理由から、ある地域の異系統土器を議論する場合、異型式（異系統）搬入土器は除外して考えた方がよい。しかし製作者ないしは製作者の属する集団が異型式土器を携えてきた場合は、製作者と発見地が関係性をもつことになる。また異型式搬入土器が発見地で模倣されると製作者と発見地が関係をもつ。本書では異型式搬入土器を異系統土器の議論の中に扱っている人と扱っていない人がいて、統一がとれていないが、それはこうした事情も反映していると思われる。

また型式の包括する範囲の確定も難しい。異系統在地土器がその地で量的に主体をなす場合（例えば称名寺式）、その異系統在地土器は在地型式と扱われる。しかし異系統在地土器がその地で少量しか存在しない場合、その異系統在地土器を在地型式とするのは一般的ではない。関西出土の堀之内式土器は関東からの移住者が関西で土器を作ったと考えられても北白川上層式とは呼称しないのである。量的に多い、少ないという理由で扱いを変えると、中間的な量の場合、どうするのかという問題が発生する。異系統在地土器は胎土分析や製作技術を含めた土器属性の観察などで在地製作が確定的となれば、量的多寡を問わず、在地型式として扱った方がよいと思う。

### 異系統土器の製作者

本書掲載の各論文で主体的に扱われた異系統（在地）土器の製作者について、大きく3種類想定されているように思われる。①は移住して来た集団が移動先で土器を作ったケー

ス。後藤氏の論文にある北部九州の弥生時代擬朝鮮系無文土器、鈴木氏の論文にある関東の縄文時代後期称名寺式土器（中津式土器）、山崎氏の論文にある中四国の縄文時代後期堀之内式土器、小林氏の論文にある縄文時代中期の貝殻文を施文した勝坂式土器、比田井氏・河西氏の論文にある関東の弥生時代後期～古墳時代前期土器がそれである。②はその土地の人が外部の土器を模倣して作ったケース。佐々木氏の論文にある北部九州・朝鮮半島南部の弥生時代末～古墳時代前期の近畿系土器が該当する。③製作者がいずれか判断できないケース。熊木氏の論文にある元地式土器やトビニタイ土器が相当する。

これらの異系統土器は、胎土分析が実施された例は少なく、たいていは胎土の肉眼観察などから在地土器と考えられているものである。しかしこうした解釈の差が出るのは、①のケースは出自系統の元の土器型式との類似度が高く、②・③の場合は元の土器型式とは違う地域の変容が表れているとか、変容していて類似度が低いからと思われる。変容の場合、在地集団が模倣したことによる変容の他に、移住者が何らかの制約を受けて出自系統の元の土器を忠実に作れなかったことによる変容、移住者の第二世代が土器を製作した場合の変容（製作のゆらぎ）も想定されよう。北部九州・朝鮮半島南部の弥生時代末～古墳時代前期の近畿系土器については地域の変容が認められることから佐々木氏の判断を尊重するが、他の変容の可能性をどのような理由から除外するか、考えなければならないであろう。そのためには、まず前提として異系統土器に対する胎土分析による製作地の絞込みを行うこと、次に変容に関わるさまざまな要因（模倣製作・製作のゆらぎなど）が、製作技術や文様と言った土器属性にどのように表れるのか、研究モデルの構築が必要になるろう。

系統という概念を扱うこと、異系統土器の成立背景を探ることはそう簡単ではない。しかし今村氏も言うように、系統という概念を用いることによってわかることも多い。今後、土器研究は単なる編年論的議論だけではなく、本書の見通したような研究戦略が一層盛んになっていくと思われる。